

諸島持続開発公社に赴任した辻さんは、かつて神戸市の須磨海岸が侵食被害に遭った時のことを思い出した。あの時は砂浜に砂を大量に投入して回復させたが、侵食対策にはいくつ手法がある。まずは状況把握が大事だと、砂浜近くの海域の水深や潮の流れを調べることになった。百戦錬磨の辻さんにはお手の物。かと思いきや、日本では当たり前を使う機材や道具が何もなく。

景観を壊さずに防波堤をつくる

そんな辻さんには、ずっとある秘めたる思いがあった。「学生時代から、自分にとって未知の世界だった開発途上国で働いてみたいと思っていました。結局地元就職したのですが、その思いはずっと持ち続けていました」。定年退職後、一念発起して30年越しの夢を実現させたのだ。

リアネ・ガンボア・コラレスさんとディアニ・キルチマンさん。それら以上のキャリアを持つベテランの土木技術者。大学卒業後は地元の神戸市役所に就職し、日本を代表する国際貿易港である神戸港の整備や人工島のポートアイランドなどの建設に携わった。今や神戸のおしゃれスポットとして有名なメリケンパークの整備も手掛けた。



砂浜の侵食が進んだことで高波が道路にまで達し、建物が破壊されることもある



だらかな性格の辻さん(左から2人目)はみんなの人気者。同僚たちに「もっと日本について知りたい」と頼まれ、日本語教室も開いている



沖で水深を測るには専用のソナーが必要。辻さんの指摘を受けてJICAの協力で機材を整備することになった

それでも調査をしなければ先に進めない。倉庫から使えそうなものを片っ端から引っ張り出してきた。ないなら、あるもので作ればいい。プラスチックの棒に10センチ間隔で線を引けば、水深測定用のポール代わりに。プラスチックの弁当箱に位置情報を探知する衛星機器を入れ、ブイにくくりつければ、潮の流れを測る装置に早変わりだ。

次々に飛び出す辻さんのアイデアに、「こんなやり方もあるのか」と驚くリアネさんとディアニさん。彼らにこの技術を受け継いでもらいたいと、来る日も来る日も3人で協力して調査を重ねた。

そして2カ月後、ついに調査結果がそろった。そこで分かったのが、潮の流れは南西方向、浸食が進んでいる砂浜の北側は水深が2メートルと浅く、冬に高い波が押し寄せる可能性が高いこと。3人でどんな対策を取るべきか話し合い、今回は防波堤を設置することに決めた。「そうすれば潮の流れが変わり、砂が砂浜に戻ってくるはずだと考えました」と辻さんは話す。

さらに彼がどうしても譲れなかったのは、コンクリートではなく、砂袋を海面下に敷き詰めて防波堤を造ること。全ては美しい景観を壊さないためだ。この案には、諸

島持続開発公社の職員たちも「環境面に配慮してこそ、本当の開発ですね」と大賛成。政府からも予算が付き、工事に向けて準備が着々と進められている。

「アキオさんが来てから砂浜の侵食対策が一気に進みました。技術者として経験豊富な彼のサポートは心強い。まだまだ学びたいところがたくさんあります」とディアニさん。辻さんも「コロンビアに来て、現場を歩き、観察し、よく知るといふ基本を再認識させられました」とうれしそうに語る。これからもみんなで力を合わせて、全力でこの美しい海を守っていく覚悟だ。

浅瀬には船で入ることができないため、自分の足で海の中を歩き回って水深を測る辻さん(中央)



倉庫から集めた素材で潮の流れを調べる装置を作製。「手作りは大変でしたが、日本ではできない楽しい体験でした」

港湾整備のプロがカリブ海へ

青い空に向けて真っすぐに伸びるヤシの木。下に目を移せば、透き通った海が一面に広がっている。南米コロンビアの離島、カリブ海に浮かぶサンアンドレス島。絵に描いたような美しい光景の中、浅瀬では数人が何か作業をしている。物差しのように線が刻まれた棒を持ち、海の中に立てて水深を調べているようだ。

「足元に気を付けてくださいね」仲間にその声をかけているのは、シニア海外ボランティアの辻明男さんだ。この島の砂浜を守り

たい。彼らの思いは一つだ。それには理由がある。ここ数十年、島の象徴でもある美しい砂浜の砂が波に流され、徐々に失われているのだ。

「昔に比べて砂浜が狭くなった」。地元の人々はそう口をそろえる。風の強い日には、波が砂浜を越えて町に押し寄せ、道路が冠水して遮断されてしまうことも。政府も対策に動き出したが、海洋保全分野の専門家が圧倒的に不足していた。



コロンビア
from COLOMBIA

シニア海外ボランティア

砂浜を守る熟練の技

南米コロンビアのサンアンドレス島。30年以上にわたり、神戸市の港湾整備を手掛けてきた辻明男さんは、この島の美しい砂浜を守ろうと奮闘している。